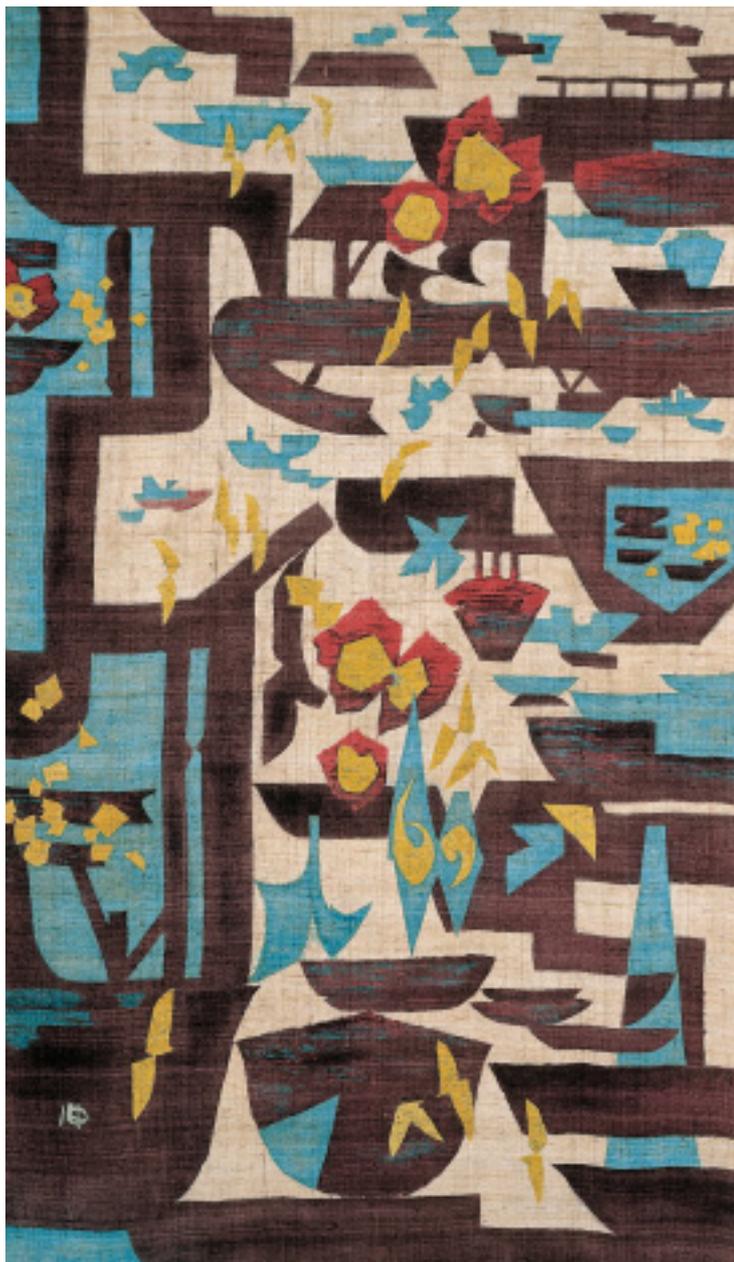


石川県立美術館だより

平成15年3月1日発行 第233号



漱(びょう) 梶山 伸 昭和42(1967)年
(2ページ「特別陳列 染色パネルの美」参照)

目次

染色パネルの美	2	展覧会回顧(平成十四年度開催の展覧会1) ...	6
婚礼調度と遊戯具、仏教美術	3	美術館小史・余話(31)	6
常設展示室 主な展示作品	4	企画展TOPIC、各地の展覧会	7
月例映画会 今月のイチ押し	4	次回の展覧会、三月の行事案内	7
企画展示室、貸出中の所蔵品	5	所蔵品紹介(130)、新年度友の会会員募集 ...	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室 第5展示室)

特別陳列

染色パネルの美

3月5日(水)~28日(金)

近現代の日本画のように額装された染色パネル作品は、現在では着物に順ずるものというよりも、独特の素材感を生かした一表現形態として、染色のジャンルにおいて確固たる地位を築いています。

日本における絵画の形態は近代になってから西洋美術の影響を大きく受け、道具・調度としての側面を強く持っていた伝統的な形式から、額装された大画面のものへと移りました。工芸の分野においても、伝統的な形式にとらわれない新しい表現を探るために、この額装されたパネル作品という形態を選択する作家たちが増えてきました。

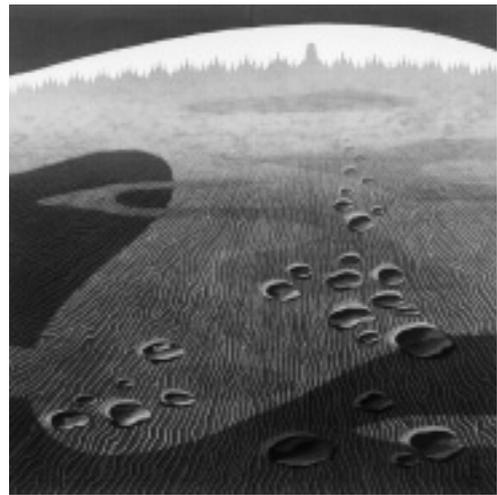
染織品は、着物に仕立てることが前提であるのが多いですが、絵画同様、平面に表現するものであるため、古くから鑑賞物として掛軸や屏風などに仕立てられることもあり、工芸の中でも特に日本画の影響が大きかったといえます。

近年は退色しやすい染料よりも顔料を使うことが多いとはいえ、紙などに絵具を置くという絵画とは違い、あくまで布地そのものを染める表現です。また着物用の着尺のように糊置き、媒染などといった工程を経る場合もあり、また一度色を置けばやり直しが難しいという限られた条件の中で表現された作品は、独特の抑制された美の世界を築いています。

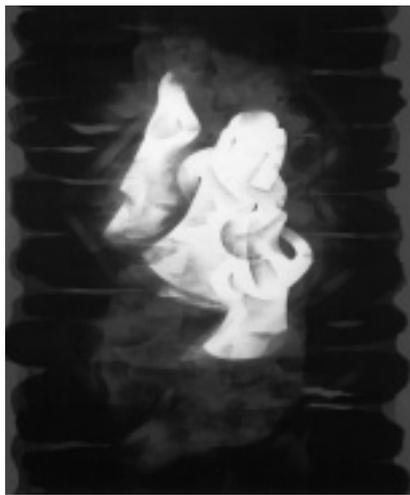


望郷 成竹登茂男
昭和56(1972)年

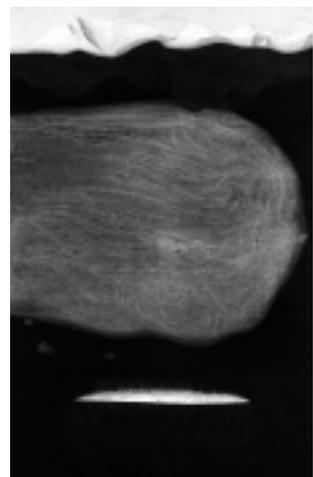
今回は常設第五展示室の壁面を使って、石川県在住の作家を中心とし、館藏品と借用品を含めた七作家・二十四点の作品を一堂に会して、絵画とも着物とも一線を画したその魅力を探ります。



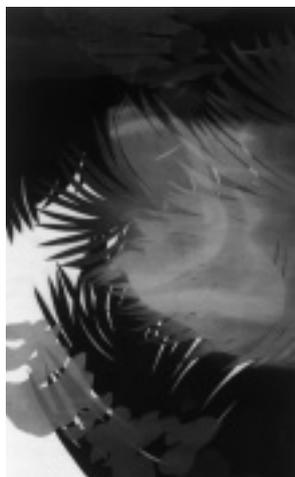
古代を憶う 堀友三郎
昭和47(1972)年



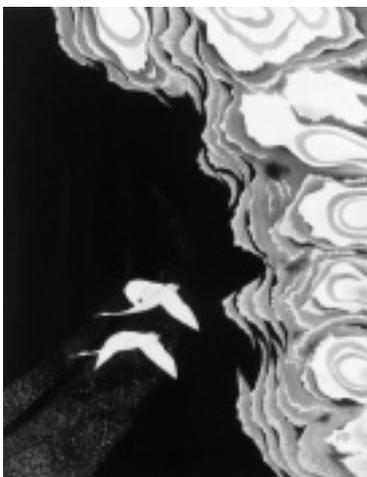
古墳への思い 鶴見保次 個人蔵
平成7(1995)年



月と陰 原峯水 松任市立博物館蔵
平成3(1991)年



南海 原峯水 個人蔵
昭和9(1997)年



海流 梶山伸
昭和54(1979)年

出品作家(五十音順)
梶山 伸 鶴見保次 中町博志 成竹登茂男
原 峯水 百貫俊夫 堀 友三郎

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

婚礼調度と遊戯具

3月5日(水)~28日(金)

今回の展示は浴姫の婚礼調度と香道具を中心とした遊戯具です。浴姫の婚礼調度として前田育徳会に所蔵されているものの中から、厨子棚をはじめ料紙箱、硯箱、歯黒箱、十二手箱など、二十点を展示します。婚礼調度とは、婚礼の際に女性が嫁ぎ先へ持参するもので、豪華な蒔絵装飾による家紋と統一された意匠が施されています。その内容品は、三棚、貝桶、化粧道具、文房具、遊戯具、武具、飲食器、楽器など、その数量は膨大なものです。

この婚礼調度は、十一代将軍徳川家斉の二十一女傭子すなわち浴姫が、加賀藩十三代藩主前田斉泰に嫁いだ際のもので、松唐草の意匠と徳川家の家紋である葵の紋が施されています。

「香」は仏教とともに奈良時代にわが国に伝わり、室町時代頃より香道という日本独特の香りの文化を生み出すこととなります。足利義政の命で、三条西実隆を始祖として、志野宗信などによって玩香(香を匂いて香りを楽しむこと)の作法が定められ、芸道としての形式が整うと、様々な流派を生んで江戸時代にかけて流行するに至ったのです。

江戸時代以後の香道は組香がその中心的存在となります。これは、いくつもの種類の香を聞き当てる遊びです。和歌、物語、漢詩、故事来歴などを主題に、三々七種の香を組み合わせたものを聞き当てる事を競うゲーム的要素が顕著となりますが、香道の本質からすれば、四季折々の趣向や主題の情緒を、香りの中で味わうところに主旨があります。代表的な組香は、源氏香、競馬香、宇治山香などです。今回展示する四種盤や桑十組盤などの盤立物はその一部です。

さらには、美しい蒔絵が施された香割道具や組香に必要な各種の道具を納めた十種香箱などの香道具、その他の遊戯具として、碁盤と碁笥、将棋盤と将棋箱など十点を展示します。華麗な調度に雅な日本の伝統を感じとっていただければ幸いです。

仏教美術の中でも仏画は、仏教絵画の略で、広く仏教関係の絵画全般をさす場合もありますが、通常は、礼拝の対象とされる仏教諸尊の画像をさします。絵画的にも重要なものも多く、その発展の概略を示すと、飛鳥時代から平安時代前期にかけては、中国・朝鮮の大陸文化の受容と展開が見られ、平安時代後期になると、日本的な独自の表現と様式を生みだし、仏画の黄金時代をむかえます。鎌倉時代にはいと禅宗や、浄土宗、日蓮宗などの新仏教が興り、内容的にも写実的で多種多様で変化に富む様相を呈しますが、鎌倉時代末期以降は、意欲的な作品が少なくなり、急速に衰退化の傾向をたどります。

幾つかの文化財を紹介してみると、まず金沢市平岡野神社蔵の金沢市文化財「愛染宝塔曼荼羅図」は、中心の塔の中に愛染明王を描き、画面上部には金剛胎蔵両界の五仏を種子で表し、下部に真言八祖像を配したもので、鎌倉時代の作例としては貴重です。輪島市金蔵寺蔵の県文化財「西界曼荼羅図」は、大日経と金剛頂経にもとづいて、それぞれ「金剛界曼荼羅」と「胎蔵界曼荼羅」が描かれますが、ともに大日如来を主尊として、密教の根本義を图示したもので、一部に截金技法を用いるなど鎌倉時代末期から室町時代初期頃に制作されたものです。金沢市大乘寺蔵の県文化財「千体仏図」は、画面の中央、方廊に釈迦像を描き、その周囲に小印仏一軀づつを安じ、全体二十七段に配した真言における曼荼羅の一つで、寸法も大きく室町時代前期頃の仏画として貴重です。金沢市如来寺蔵の市文化財「阿弥陀三尊来迎図」は、画面左上から画面外の往生者に向かって来迎する阿弥陀三尊の斜来迎図で立像乗雲の阿弥陀如来とこれに蓮台を捧げ蹲りする観音、侍立合掌の勢至菩薩が描かれるなど、南北朝時代の作例として貴重です。このほか、金沢市高巖寺蔵の市文化財「仏涅槃図」、同じく金沢市大乘寺蔵の「釈迦十六善神画像」、門前町総持寺祖院と金沢市大乘寺でそれぞれ所蔵され、ともに県文化財となっている「十六羅漢図」など当館に寄託されている仏画を展示します。



金沢市指定文化財
阿弥陀三尊来迎図
如来寺蔵

常設展示室(第2展示室)

特集

仏教美術

3月5日(水)~28日(金)

常設展示室 主な展示作品

3月5日(水)~28日(金)

●=国宝 =重要文化財
=石川県指定文化財
=金沢市指定文化財

前田育徳会展示室

特集 婚礼調度と遊戯具
葵紋時絵調度品 浴姫所用
四種盤
村梨子地唐松唐草御紋時絵十種香箱

第1展示室

●色絵雉香炉
色絵雌雉香炉

野々村仁清
野々村仁清
野々村仁清

第2展示室

古九谷
色絵鳳凰図平鉢
青手樹木図平鉢
特集 仏教美術
両界曼荼羅図
阿弥陀三尊来迎図

金蔵寺蔵
如来寺蔵

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

油彩画
春めく
連理
彫塑・造形

村田省蔵
脇田和

獅子
目鼻のある胴体
犬

相川松濤
田中太郎
山本力吉

第5展示室(工芸)

陶磁・漆工
青手小禽文飾皿
浅春時絵小笥

北出不二雄
寺井直次

特別陳列 染色パネルの美
2ページをご覧ください

第6展示室(日本画・書)

春を待つ
早春
書
曉雲
万寿無疆

滝川真人
原田太乙
久田鶴南
表立雲



連理 脇田和

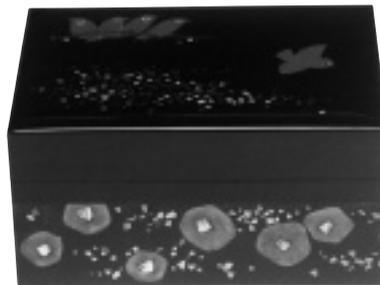


青手樹木図平鉢 古九谷

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	
観覧料(特別陳列を含む)			



春を待つ 滝川真人



浅春時絵小笥 寺井直次



目鼻のある胴体 田中太郎

月例映画会 今月のイチ押し

職人芸をたっぷりと。どうぞお見逃しなく!!
三月の月例映画会は、次の六本を上映いたします。

三月九日	「結城紬 大里ふく・北村勘一・北條きのこ」	梵鐘 香取正彦	(25分)
三月十六日	「余韻は生きる」	梵鐘 香取正彦	(25分)
三月十六日	「流人哀歌の織りもの 黄八丈 山下めゆ」	銀線細工 高坂雄水	(25分)
三月二十三日	「白銀の細工師」	銀線細工 高坂雄水	(25分)
三月二十三日	「久留米餅 松枝玉記」	筆筒金具 菊池政雄	(25分)
三月二十三日	「筆筒町の老職人 筆筒金具 菊池政雄」		(25分)

当館には、伝統工芸関係の映画フィルムが、数多く収蔵されています。その中には、通常よく紹介される作家に関するものももちろん、あまり名前を聞かないマイナーな工芸職人たちを紹介するものも含まれています。昨年の秋には、「利家とまつ 加賀百万石物語展」にちなんで、石川の伝統工芸特集として、当県ゆかりの著名な作家の映画を取り上げましたので、今回は、もう少しなじみの薄い職人たちの技を、まとめてご覧いただこうと思います。

「結城紬」は、国の重要無形文化財に指定されている織物で、茨城県結城市のあたりで作られています。真綿から糸を紡ぎ、それを撚って藍に染め、そして機で織り出すという、一つ一つの手作業が丁寧に行われ、携わる人々の真心が伝わってくるような内容です。

「梵鐘」とは、仏の功徳を、その大きく響きわたる音で現し、無明を打ち破って、人々に平和の安らぎを伝える、仏教の宝器とされています。映画では、鍍金の大家・香取正彦氏による梵鐘の制作の様子を、原図の作成から梵鐘が誕生するまで、詳細に映し出しています。

「黄八丈」は、八丈島に伝わる織物で、絹糸を草木染め、泥染めにし、手織りで丹念に仕上げられます。かつては全島で作られていたといいますが、山下めゆという一人の婦人によって受け継がれた貴重な技術を、映画では見ることが出来ます。

「銀線細工」は、秋田の地で、銀を使った細工で

(次頁下段へ続く)

企画展示室

第25回記念一創会展金沢展

三月七日(金)～十二日(水)
(第8・9展示室)

新春、東京都美術館にて開催された本展の中から、基本作品、受賞作品及び石川県内作家の力作約百二十点を運び、金沢での記念巡回展を開催致します。

何ものにも制約されない自由な作品群をご鑑賞下さい。

主な出品作家

- 横塚 繁 今村昭寛 真辺啓介 寺西武久 西山英一
- 増田真人 蓮井廣幸 梅沢曜行 虎井 修 松本陽子

入場料 一般五〇〇円 大高生四〇〇円
中学生以下無料(団体料金は各一〇〇円引)

当館友の会会員は会員証提示により団体料金。

連絡先 小松市二ツ梨町ク 一九一五 寺西武久
☎〇七六一 四四 四三三五

第26回伝統九谷焼工芸展

三月十一日(火)～二十七日(木)
(第7展示室)

昭和五十一年に郷土が誇る九谷焼の技術保存と発展向上を図るため、九谷焼技術保存会が石川県無形文化財として指定されましたが、本展はその技術保存会の事業の一つとして毎年行われている公募展で、今回は二十六回目です。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

入場料 一般三五〇円 大高生三〇〇円
中小生二五〇円(団体は各五〇円引)

当館友の会会員は会員証提示により団体料金。

連絡先 能美郡寺井町寺井三三五 石川県九谷会館
☎〇七六一 五七 〇一二五

'02玄土社書展

三月十五日(土)～十七日(日)
(第8・9展示室)

玄土社の02年の歩みをまとめた創作(前衛抽象)五十四点、臨摹(古典)十九点を展示いたします。創作は自由奔放にチャレンジ精神で、臨摹はあくまでも古典に忠実に。この基本姿勢に揺るぎはありません。自己開放と緊張感を愉しみながら活動を続ける玄土社です。玄土社ならではの書の世界へお誘いいたします。

今回は加えて、中国文物出版社(中国出版界トップ)が後援、45周年特別展示会が併催されます。内容は、中華文明の粋を伝える出土文物資料、書籍、碑法帖、拓本等、興味深いものです。

会期中の行事 「表立雲トークタイム」
日時・会場 三月十六日(日)午後二時 講義室
入場無料

連絡先 金沢市本多町一 七一五
☎〇七六一 二六三 〇一二二

玄土社主宰表 立雲 理事長松村知春

第27回日本海造型展

三月二十日(木)～二十六日(水)
(第8・9展示室)

日本海造型会議の十九名が、自己表現の可能性を追求し、絵画、彫刻、デザイン、映像、建築、書、造形、漆、陶、ファイバー等の意欲作を発表します。既成のジャンルを超え、交流する中で、新しい北陸の文化の醸成に努めようとするものです。今回はテーマを「発」とし、一室触れることの出来る作品もあります。

入場料 一般六〇〇円 大高生四〇〇円 中小生二〇〇円

当館友の会会員は会員証提示により各一〇〇円引。

連絡先 金沢市山科一 一四 四〇 三井泰子
☎〇七六一 二四一 二七七九

知られる高坂雄水氏の技を紹介しています。それは、銀の細い線を、指先の微妙な感覚をたよりに、縄状によりあわせ、小さなモチーフをたくさん作り、それらを纏つけしながら、全体の形を構成していくという技術です。

「久留米絨」は、江戸時代末期に創始されたと言われる庶民的な木綿絨の代表的なものです。重要無形文化財に指定されており、その技術を保持する第一人者が、松枝玉記氏です。久留米の織屋に生まれ、藍染めの絨一筋に生きてきた氏が、畢生の仕事として取り組んだ大作の、克明な制作記録が、この映画です。

「筆筒金具」は、岩谷堂筆筒の金具師・菊池政雄氏の技術を取り上げています。岩谷堂筆筒は、岩手県を代表する伝統的な工芸品で、奥州藤原氏が産業を奨励した平安時代末期に始まるとされています。長い年月を経て伝わったその技によって、細やかで重厚な作品が生み出されていくのがわかります。

こうした映画を見ていくと、さまざまな場所や分野で、伝統を守り育てていくこうとする人々が、日々努力していることがわかり、その存在を再認識するよい機会になることと思われれます。

上映する映画は、少し内容が古いため、現在の状況とは異なっている部分がありますのでご了承下さい。

貸出中の所蔵品

- 色絵人物図古九谷写平鉢 初代須田菁華作
 - 色絵山水図大鉢 初代徳田八十吉作
 - 芦雁大皿 二代松本佐吉作
 - 色絵水鳥図古九谷写大鉢 九谷陶器会社作
- 他四点、計八点
- 展覧会 「至高への敬慕 古九谷を模す」展
会期 二月八日(土)～四月十三日(日)
会場 石川県九谷焼美術館(加賀市)

三味線

- 展覧会 北野恒富展 浪花画壇の悪魔派
 - 会期 二月一日(土)～三月二十三日(日)
 - 会場 東京ステーションギャラリー
- 北野恒富筆 計一点



平成十四年度開催の展覧会(一)

今年度も当館では、一階の企画展示室や二階の常設展示室で数多くの展覧会が開催されました。

企画展としては、当館主催の「日本芸術院会員大樋長左衛門の世界」、利家とまつ 加賀百万石物語展 前田家と加賀文化、「鳥と語る 詩魂の画家脇田和展」や、「国立カイロ博物館所蔵 古代エジプト文明展」、「菅原道真公一〇〇〇年祭記念 北野天満宮神宝展」などの報道機関主催の企画展、また各種美術団体の公募展や巡回展というように、今後三月末までに開催予定のものを含めまして三十二回を数えます。常設展示室で行った特別陳列や特集は二十六回となり、一階と二階を合計すると五十八回という多くを数えたいと思います。

黒絵立鼓花器 大樋長左衛門(年朗)



「日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界」は、同時期に企画展示室で古代エジプト文明展が開催されましたので、常設第5・6展示室の二室で開催いたしました。昭和二年に九代大樋長左衛門の長男として金沢に生まれ、伝統ある大樋焼茶陶を継承するとともに、東京美術学校で学び、感性鋭く、現代感覚あふれる作品を日展などに発表し続けて、平成十一年に日本芸術院会員に就任された大樋長左衛門氏の本格的な回顧展

として初めて開催されたものでした。幅広い作陶世界を茶碗・水指・香合・花入などの伝統的な茶陶と日展や日本現代工芸展を主とする展覧会出品作品、

そして建築空間との関わりを持つ陶額・陶壁(写真パネルを展示)に分けて展示し、軽妙・洒脱な絵画と漆芸の棗や木工の椅子などもあわせて展示し、作者の芸術世界を余すところなく紹介する内容でした。鑑賞者からも、日本のみならず広く東洋陶磁全般への深い理解と常に新しい作陶表現を目指す作品群に賞賛の声が聞かれました。また、作者によります講演会「私の作陶人生」も大変好評でした。

「国立カイロ博物館所蔵 古代エジプト文明展」は、平成三年に開催された『黄金のエジプト王朝展』以来のエジプト文明展でした。エジプト政府の特別な協力により、日本初公開の名品を含む七十五点の作品を「ファラオの興り」、「ファラオの隆盛」、「ファラオの栄光」、「ファラオの交流」、「ファラオの輝き」の五つのテーマにより構成し、絵画やレリーフ、彫像、道具、装飾品などにより、ナイルの豊かな恵みによって開花した驚くほど高度化された文明を紹介する展覧会でした。『プスセンネス一世の黄金のマスク』をはじめとする黄金作品への関心、あこがれもあり多数の入場者でにぎわいました。

(南 俊英 学芸第一課長)

美術館小史・余話

31

嶋崎 丞 すまむ 当館館長

一般に美術館とか博物館という機関は、月曜日が休館となっているところがほとんどである。旧館時代の石川県美術館も昭和四十七年までは月曜休館であり、私共同様兼六園の周辺にある各種博物館は、みなそうであった。

周知のとおり昭和四十年代に入ってから日本経済が急成長し、国民の所得も増大して国内旅行が盛んとなってきた。金沢の街は、江戸時代以来の古き良きたたずまいを残していることから、旅行者のターゲットとなり、この頃より多くの観光客が訪れるようになってきた。

その頃の旅行のスタイルを見てみると、日曜日を挟んでの土・日・月の三連休という人が多かった。そこで月曜日は開館した方がよいのではないかとということになり、金沢市内の各博物館は火曜日から金曜日の間に、それぞれが重ならないよう休館日を設定し、当館ではそれを金曜日としたのである。ところが、博物館は一般的に月曜休館という慣例が徹底していたためか、月曜日に開館しても入館者は少なく、かえって金曜日に休館していることで不評を買ってしまった。

たまたま金曜休館日に、何かの用事で故中西前知事が来館され、丁度その時に観光客らしいおばさん達が玄関に集まって、中をのぞきこむようにしていた状況を目にされた。そして声をかけられたところ、おばさん達は知事と知って、観覧できないかという交渉が始まった。その時は作品の入れ換え作業中だということで、観覧できない理由を話し、引き取っていただいていた一件落着したが、その後、知事からは年中無休で運営ができないかとの下問があった。そこで種々検討の結果、昭和五十年四月より、公立としては珍しい年中無休(展示換えと年末年始を除く)の美術館となり、今日に至っている。

年中無休開館決定のいきさつ



願いの糸 大正3(1914)年 木下美術館蔵

企画展TOPIC

北野恒富展

金沢が生んだ美人画の巨匠

来年度は、当館の開館二十周年にあたり、それを記念する展覧会を予定しています。まずその第一弾は、春に開催する「北野恒富展」です。北野恒富は日本画家ですが、ご存知ない方もいらっしゃると思いますので、今回はまず、その人物について、ご紹介したいと思います。

恒富は、明治十三年、金沢市に生まれました。本名は富太郎。幼少から絵を描くのが好きであつたらしく、二十五年小学校を卒業すると、銅版木版書画の版下業をしていた西田助太郎に入門し、版下彫刻に従事しました。またその頃、市内の寺の住職から、漢字や南画も学んでいきます。その後、版画の彫り師のもとを転々とし、明治三十年彫刻師中山駒太郎に伴われて、北國新聞の彫刻部に勤めるようになり、かたわら新聞の挿絵を研究しました。中山は、「画家八都会ニアラネバ面白カラズ」と、恒富に都会行きを勧め、大阪の彫刻師であつた伊勢庄太郎や、画家・稲野年恒などに紹介状を書いてくれたことで、恒富は、大阪へ旅立つことになるわけです。

大阪に着いた恒富は、まず伊勢庄太郎に入門し、彫り師の仕事に携わり、翌三十一年、稲野年恒の門をたたきました。年恒は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師、月岡芳年の弟子で、同門には鍋木清方の師・水野年方がいます。恒富は、次第に彫り師の仕事から、絵描きの道へ進むことになり、まずは挿絵で活躍しました。二十五歳の頃から、次第に展覧会を意識した制作を行うようになり、その後、横山大観に私淑したり、画壇で頭角を現してきていた、同年代で東京出身の野田九浦の知遇を得、本格的に画技を磨いていきます。そして、四十三年第四回文展に初入選した「すだく虫」が注目され、翌四十四年には、「日照雨」で三等賞を得て、画壇にその名が知られるようになったのです。

大正に入ると、アール・ヌーヴォーの影響を受けたポスターなども制作し、評判を呼びました。本画では、活動の舞台を院展に移し、三年の第

一回展から出品し、数々の名作を生み出し、大阪の中心的な院展作家として活躍していきます。また、昭和初期には谷崎潤一郎とも親交を結び、小説の挿絵も数多く描きま

した。本展は、昭和二十二年六十八歳で没した恒富の、主要展覧会の出品作品を中心に、ポスターや素描、挿絵など資料もあわせて展示し、その業績を振り返ろうとするもので、没後半世紀をへて開催する大回顧展といえます。

ちなみに、当館主催の展覧会で、近代日本画に關したものは、これまでいくつか開催してきましたが、企画展示室二室を使った個人の大きな展覧会は、平成二年の「日本画壇の巨匠 西山英雄展」以来です。西山氏の作品は、大自然の鼓動が伝わってくるような、ダイナミックな風景画でしたが、生涯、女性の美を追究してきた恒富の作品は対照的で、独特の艶麗な輝きを呈した「美人画」が中心です。そのあたりの作風については、次回に述べてみたいと思います。

本展は、すでに東京で開催されており(本紙5ページ参照 三月二十三日まで)、そのあと当館へ巡回します。

(西田孝司 学芸主査)

「開館20周年記念 北野恒富展 金沢が生んだ美人画の巨匠」
四月二十六日(土)～五月二十五日(日)

三月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
3/1(土)	土曜講座	ルーベンス 人と芸術	講義室
3/2(日)	CDコンサート	黛 敏郎 「涅槃交響曲」「曼荼羅交響曲」(約60分) 指揮 外山雄三/演奏 NHK交響楽団	ホール
3/8(土)	土曜講座	日本の金工 13 梵鐘・香取正彦 肥後象嵌・米光太平	講義室
3/9(日)	月例映画会	結城紬 大里ふく・北村勘一・北條きの(25分) 余韻は生きる 梵鐘 香取正彦	ホール
3/15(土)	土曜講座	染色パネルの美 鑑賞の手引き	講義室
3/16(日)	月例映画会	流人哀歌の織りもの 黄八丈 山下め由(25分) 白銀の細工師 銀線細工 高坂雄水(25分)	ホール
3/22(土)	土曜講座	水彩画の美 3	講義室
3/23(日)	月例映画会	久留米餅 松枝玉記(25分) 箆筒町の老職人 箆筒金具 菊池政雄(25分)	ホール

三月の全館休館日は三月(月)、四月(火)、二十九日(土)、三十一日(月)です。

各地の展覧会

三月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。
織りだされた絵画
国立西洋美術館所蔵17、18世紀タピスリー 3/18～5/25
国立西洋美術館(東京都台東区・03-3818-5331)
時の贈り物 木村コレクション特別公開 3/1～3/30
愛知県美術館(名古屋市中区・052-971-5511)
生誕100年記念 棟方志功展 3/30まで
滋賀県立近代美術館(大津市・077-543-2211)
ウィーン美術史美術館名品展「ルネサンスからバロックへ」 3/23まで
京都国立近代美術館(京都市左京区・075-761-4211)
現代美術への視点 連続と侵犯 3/23まで
国立国際美術館(吹田市千里万博公園・06-6876-2481)

次回の展覧会

特集 春の優品選(前期)

(前田育徳会展示室)
(第2展示室)
四月一日(火)～二十日(日)



牧歌

宮本三郎

明治38年(1905)~昭和49年(1974)

昭和47年 1972

第30回二紀展(昭和51年)

縦130.2 横162.2(cm)

晩年、作者はギリシャ神話や聖書に題材を得て、数々の名作を生み出した。本作は、ギリシャ神話の、牛に化けたゼウスが、美しいエウロペを背に乗せてエーゲ海を渡り、クレタ島へ連れ去っていくというエピソードを描いたものです。ちなみに、ゼウスとエウロペの子がクレタ王となるミノスで、その子が半人半牛のミノタウロス。そして、ヨーロッパの名の由来はエウロペからきている等々、神話のエピソードは知れば知るほど果てしなく広がってゆきます。

ヨーロッパの古典ではルーベンスの「エウロペの略奪」などにみられるように、やや劇的な情景として描かれたりしますが、宮本は全面深い青色を主体として、夜と海の神秘的な雰囲気をよく醸し出した叙情的、牧歌的作品として描きました。制作は四十七年ですが、サインはなく、あるいはまだ、制作途上にあつたのかもしれません。展覧会への出品は、没後の五十一年、第三十回二紀展で、創立会員回顧室に飾られました。

作者の宮本三郎は小松市の生まれで、川端画学校に学んで藤島武二の指導を受け、のち安井曾太郎に師事しました。戦時中は陸軍省から派遣されて南方戦線に従軍取材し、「山下・パール両司令官会見図」で帝国芸術院賞を受賞。記録画の花形作家として活躍します。戦後二十二年に二紀会を創立し、その中心的存在となつて会の運営にあたり、四十二年二紀会初代理事長に就任。また、前年の四十一年には日本芸術院会員となるなど、戦後を代表する写実系具象画家の一人でした。

三月一日(土)より受付開始!! 新年度友の会会員募集

募集定員 二、〇〇〇名(定員に達し次第締切)
会費 一、五〇〇円(年額)

受付場所 当館図書閲覧室

受付時間 休館日を除く午前九時三十分

午後四時三十分

郵便でのお申し込みの場合

ご希望の方は郵便振替をご利用下さい。

詳細は『美術館だより』第三三号をご覧下さい。

会員証は『美術館だより』とともに三月末頃からお送りいたします。

郵便振替口座 00700 7 46490

加入者名 石川県立美術館友の会

会員の特典

当館主催展覧会入場料の割引

『石川県立美術館だより』を毎月郵送

お問い合わせは当館普及課友の会係まで

☎〇七六 一三二 七五八〇



新年度会員証(見本)
色変鶴菱文唐織 前田家伝来
江戸時代

休館日

三月三日(月)・四日(火)・二十九日(土)・三十一日(月)

石川県立美術館だより

第一二二三号 平成十五年三月一日発行

〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三二)七五八〇

FAX 〇七六(二二四)九五五〇